江之島絵図小考

——絵図屋版について——

前田元重*

Note on Wood Cutting Picture, Enoshima-Ezu

——on Ezuya prints——

(With 2 figures)

Motoshige MAEDA

1

ここにいう江の島絵図とは，江戸時代に出版された旅人のための案内絵図のことであって，錦絵でないことを冒頭に記しておく。

江の島に関する錦絵が，江戸において出版されだしたのは，天明頃（1781—1788）からで，その数は江戸時代を通じて百数十種にも及ぶといわれる(1)。勿論このような江の島に関する豊富な錦絵が出版されたということは，江戸の市民と江の島とのつながり，すなわち江の島が，有名な弁財天を祀る霊験あらたかな土地であり，且しばしば江戸の地に出開帳を行ないよく知られていたこと。更に江の島を中心とする周辺の海岸美が，江戸の市民を魅了したことにもよるであろうが，それにもまして，江の島が参詣遊山の地として，江戸から手近かな距離にあったということにも大きな原因がある（江戸からは普通，三泊四日の旅）。

しかし錦絵はそれ自体見て楽しむものであって，旅へ誘いこそすれ，旅人に対する実際の案内絵図ではない。旅の実際の手引は道中記であり，あるいは名所記の類であり，更にその土地そのものの案内絵図である。道中記，名所記はさておき，その土地そのものの案内絵図は，その土地にあってこそ利用価値が出てくるもので，普通現地で出版，販売されたらしい。江戸時代の鎌倉，金沢八景，また江の島もその例外ではない。

それでは江の島の場合，そのような案内絵図は，何時頃，何処で，どのようなものが作られていたかを考察してみたい。

2

高山彦九郎は安永九年（1780），江の島に参詣したことを，彼の旅日記「富士山紀行」中に書きとどめている(2)。それには江島上の社を拝した折「江の嶋の図を板行而此社より出す，十六銅を置而余も求タリ」と，上の社から「江の島の図」—図版第二図— が売られていたことを記しており，また天保四年（1833）江の島案内を主眼として出版された，平亭銀鶏著「江の島まうで浜のさゞ波」には，「上の坊といへるあり此坊より江の島の図をいだす価三十二文也」とあり，ここにも上の坊より「江の島の図」が売られていたことを述べている(3)。当時の江の島は，金亀山与願寺と号し，本宮，上ノ宮，下ノ宮に分れ，岩本院，上ノ坊，下ノ坊がそれぞれの別当して分司していた。この上の坊は，江の島のほぼ中央の山上にあって，上の社を司どっていたそれである。しかしこの「江の島の図」が果たして案内絵図であったかどうかということになるが，その前にもっとも，江の島の案内絵図

* 金沢文庫

として確実なものと思はれる「絵図屋版」をとりあげてみる。

3

絵図屋善兵衛版
彫工　江戸市ケ谷　江川

江嶋一望図

文化五年刊。墨刷。
縦33センチ　横48センチ
金沢文庫蔵
図版　第一図

図版第一図として掲載したこの文化五年の絵図屋版には大変興味のある刊記が述るされている。すなわち図の右肩にあるのがそれで，全文を掲げると，

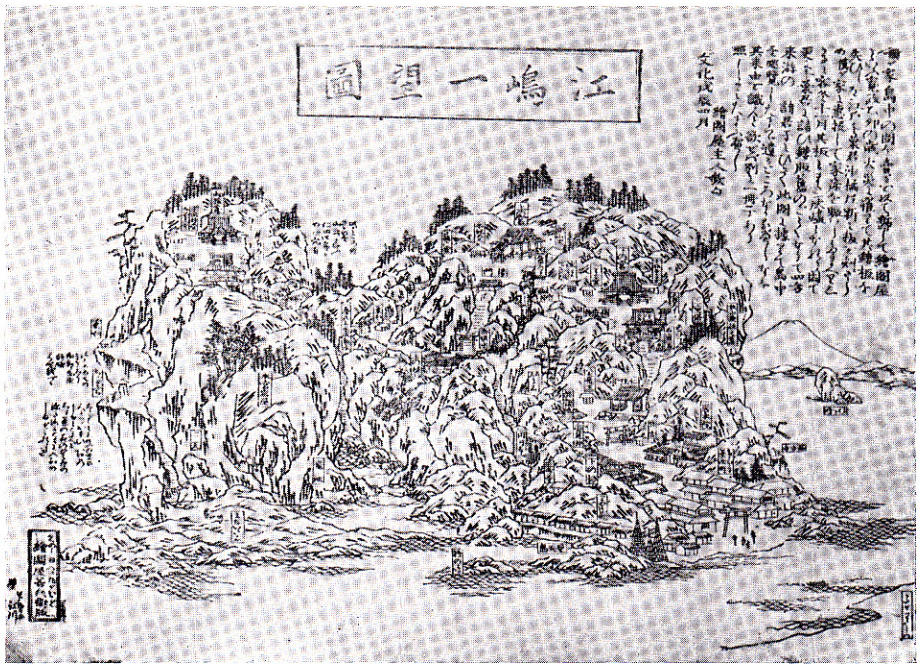
僕が家島中の図を売るを以て号して絵図屋「といふ。寛政乙卯の歳，火災に罹りて其鏤板を「失ひしを，江戸千葉君沙橘尼新に板を刻さし「め，僕が家に恵投して家産を賑はしたまへり。し「かるに客冬十一月其板もまた灰燼しなれり。因て「更に千葉君に請ひ鏤板旧のごとくなりて，四方「来游の諸君子にひさぐ，此図に拠りて島中「を巡覧したまはゞ遺るところなかるべし。なお「其来由を識んと欲せば別に一冊子あり，「照しまえたまふべし

絵図屋主人欽白

文化戊辰四月

これほど資料的に見て，刊記のはっきりしている絵図は珍らしい。文中に「僕が家島中の図を売るを以て号して絵図屋といふ」。また「此図に拠りて島中を巡覧したまはゞ遺るところなかるべし」，とあるのはまさに「江嶋一望図」と題すれこそ，案内絵図そのものであることがわかる。しかもこの絵図には左下に版元をはっきり「江島入口左がわかど　絵図屋善兵衛版」，「彫工　江戸市ケ谷　江川」と並記している。すなわちこの「江嶋一望図」は，江戸在住の絵師が描き，江戸市ケ谷住の彫師江川により刻まれ，その板をもとに江島住民の絵図屋善兵衛なるものによって刷られ且売られたのである。

この江島入口左がわかどは，すなわち西町あるいは茶屋町ともいわれたところで，『鎌倉攬勝考』(1829年刊）には，「茶屋　一の鳥居より，坂路の左右に軒を連て，食料酒饌を商ふ。茶屋凡二十軒許。参詣の旅客，魚味に飽んことを欲するもの，必ず玆に憩ふ」と記し，前掲書「浜のさゞ波」では，「江の島の入口を昔ハ本宿といひしが今ハ西裏といひ又西町ともいふ此処左右に駅舎（はたごや）ありて中の通リハ石坂なり右の中程に岩本院といへるあり」と述べ，いずれも，茶屋，旅籠屋の列居していたことがわかる。更に同書の別項において，著者銀鶏は旅人の便利のためにと旅籠屋の名をくわしく挙げている。すなわち「又いふ江の島の入口を西町といふ旅籠屋十二軒あり右がハ八軒左がハ四軒なり左の裏を猟師町といふはたご三軒あり右の裏に六軒あり」と記し，なおくわしく，西町駅舎（はたごや）右側（みぎかハ）の部，同駅舎（はたごや）左側之部，西町右裏駅舎（はたごや）之部，猟師町駅舎（はたごや）之部に分け，「旅舎（はたごや）惣じて二十二軒」の名前をのこらず順次に記載している。その「同駅舎（はたごや）左側之部」の最初に絵図屋善兵衛の名がある。まさにこの絵図屋善兵衛という旅籠屋のもつ位置は，「江嶋一望図」の刊記にある絵図屋善兵衛の位置と同一場所である。すなわち絵図屋は，旅籠屋を営みながら旅人のために絵図を出版販売していたのである。もっとも年代的にみて，この「江嶋一望図」は文化五年版であり，「浜のさゞ波（江の島まうで）」は天保四年刊であるので，絵図屋ははじめ絵図の出版販売を専業にしていて，のち旅籠屋を兼業したか，あるいは最初から兼業していたのかどうかわからない。しかしこの絵図屋は江の島においては古くから存在していたとみえ，現在下の宮境内にある福石の傍らに，その標石をかねて建てられた，寛政四年（1792）九月造立の庚申供養塔が残っているが，それには造建主の名が刻まれており，当所として，北村屋忠左ヱ門，讃岐屋八郎左ヱ門，絵図屋善兵衛，橘屋武兵衛，北村屋五郎



第一図　絵　図　屋　版　　33×48 cm　　（金沢文庫蔵）

第二図　上　之　宮　蔵　版　　36×48 cm　　（金沢文庫蔵）

兵衛，秋岡鎮蔵，杉田屋新兵衛，江戸屋忠五郎の八名の名がある。秋岡鎮蔵，杉田屋新兵衛を除き，外全部は前掲書「浜のさゞ波」の旅舎之部の中にその名を見出すことが出来る。

寛政年中（1789—1800）といえば，もう江戸市民の江島参詣は盛んな頃で，寛政九年（1797）に刊行された「東海道名所図会」には，江の島の例祭のことを記して「毎歳四月初巳日巳剋窟本宮より山峯の御旅所まで音楽にて祭礼あり」，「此日江戸よりは行路僅に十三里なれば，男女童のわいためもなくこゝに詣し，近国近郷の浦々は船を漕つれ，みな此祭式を拝まんとて群集する事，海陸の賑ひ大方ならず，山下の旅舎には遠近の詣人を止め饗応す」と述べており，例祭の日のいかに参詣人の多かったかしのばれる。「増訂武江年表」によれば，江戸市民の江の島詣での初見は，寛延二年（1749）で，「今年江の島弁財天本社にて開帳あり，江戸より参詣の輩多し」とある。享保二年（1717）太宰春台は，金沢八景，鎌倉，江の島に旅した折のことを「湘中紀行」に書きとどめているが，江の島入口附近，すなわち西町あたりのことを「渡口左右，皆為二漁家一，直上二山路一，店肆比屋如二魚鱗一」と記し，同行者安藤東野は「遊相紀事」の中に，「人居寛整，有レ如二都会一，已入レ山，石階整斉」と述べ，いずれも西町附近の有様が，参詣人の受入態勢の出来ていることを示している。

以上のことから少くとも江戸中期のはじめ頃からは，かなりの参詣人があったことがわかり，絵図屋などもそのころから存在したのではないかと推測される。

ついでながら江の島の旅籠屋の戸数は，「鎌倉攬勝考」によれば，茶屋，御師の家を含めて凡五十軒位が旅人を宿泊させていたようで，「江の島まうで浜のさゞ波」では御師の家を含めるとやはり五十二軒位となる。風土記稿でも，やはり五十軒位と考へてよかろう(4)。これは天保十四年（1842）東海道筋の旅籠屋が，藤沢宿四十九軒，平塚宿五十四軒，戸塚宿七十五軒，保土ケ宿六十七軒(5)と比較するとあまり大差がない。いってみれば東海道筋の一宿が江の島に出来たと同様なものである。

これほどに江の島に宿泊設備があったことは参詣人の多かったことを裏書するもので，その参詣人目当てに案内記なり，案内絵図が出版されたとしても不思議ではない。いや却って旅人の望みをみたしたであろう。銀鶏は「江の嶋へはじめてまうづる人は本宮，上の宮，下の宮と三ケ処にあることはしらず，下の宮より岩屋へ参詣して上の宮へまゐらずにかへる人あれば，今道者のためにくわしくここにいふ」と，参詣人のために順路を教へているが，これが事実ならば案内絵図は出版される必然性がある。絵図屋版の刊記に「新に板を刻さしめ，僕が家に恵投して家産を賑はしたまへり」とあるのは，まさしくこの要望に答へ，かつ如何に売れ行きがよかったか想像される。

4

以上のことから，案内絵図が旅籠屋から出版されていたことがわかるが，それでは何時頃から出版され，どこまで信用の出来るものであったかということである。

絵図屋版のみに関していえば，はっきりしているのは文化五年（1808）であるが，刊記中に「寛政乙卯の歳に火災にあいその板木を焼失した」とあるので，絵図屋版は少なくとも寛政七年(1795)以前には出来ていたことは確かであるし，また先に述べた寛政四年建立の庚申供養塔の造立主の中に絵図屋善兵衛の名があるので，この頃には既に案内絵図の類を出版していただろうことは，屋号から推しても誤りはない。〔今回は，上の宮蔵版，東北大学所蔵の「相州江嶋之図」には触れることが出来ないが，図版第二に示した上の宮蔵版が，絵図屋版と比べて見て，これもまた案内絵図の類であったことがおわかり願えると思うが，これが高山彦九郎の購めた「江の島の図」と同じものであるとすると，上の宮版は安永九年（1780）には既に売り出されていることがわかる。東北大学のものは更に古く，寛文頃（1661—1669）といはれているが，筆者は現物は未見であるが，写真のみにて考証した所，まず寛文年中であるとみて誤りはなかろう。これは今のところ，江の島絵図と

してはもっとも早いものである]。

次にそのような案内絵図は，どこまで信用出来るかということ，例えば刊記と絵図の状態が合致しているか，正しく記載されているかどうかなどである。この文化五年版のみに関していえば，刊記にあるごとく文化四年に焼失した折には「因て更に千葉君に請ひ鏤版旧のごとくなりて」とあり，うっかりするとそれは寛政七年焼失後，そのあと直に板刻された時の版の状態のままを彫りおこしているかの如く考えられるが，実際はどうであったか，それには面倒ではあるが，図中に記載されている建造物の造建年月を一つ，一つ確めねばならない。その場合，当然新編鎌倉志，江島大草紙，東海道名所図会，鎌倉攬勝考，新編相模風土記稿などを参照せねばならないが，風土記稿はともかくとして，前四者の場合は記載例も少なく，脱漏などもあるので注意してかからねばならない。それらに準拠したため誤りを冒かすことも出てきよう。風土記稿は天保十二年刊であるのでその年代を熟知して操作する必要がある。したがってやはり古文書（この場合は岩本院文書）なり，金石文，日記類によって更に確めることが肝要である。そして図中に記載されている物件の中で，最も新しい年月によって造られているものを抜き出してくれば，少なくともその絵図の作成年代の下限が得られる。それと刊記と比べればよい。この文化五年版の場合には，そのような操作の結果，図中左端の「ちごかふち」と記載された傍らに，「海上めあてのとうろう」，「南郭先生詩碑」，「はせをづか」と記し，常夜燈一基，詩碑二基が描写されているが，この南郭先生詩碑が決め手となる。南郭先生とは服部南郭（天和三年1683——宝暦九年1759）のことで，徳川時代の高名な儒者である。現在も児ケ淵に遺るこの詩碑の裏面には翁（南郭のこと）逝いて殆五十年，文化二年にこの詩碑を建てたことを刻んでいる。この図中では，これが一番新しい建造物で，したがって文化五年の再刻は，最近の時点の出来事までを記載していることがわかり，決して寛政七年から文化四年前の間に再刻された旧の版の通りに，彫られたものではないことがわかる。このように一例ではあるが，絵図屋版は，本来絵図屋と称するごとく，案内絵図に対して忠実であるように見うけられる。また他から出された絵図に比しても記載例も多い。このことは当然ながら良い結果をもたらす。例えば図中真中より右下に「円可寺」が記載されているが，東北大学所蔵のものを除いては，他の絵図には記載されたものがない。この円可寺は江島大草紙（宝暦四年刊1754）に「東山ノ半腹ニ在リ真言宗ニテ手広の青蓮院ノ末寺ナリ，実ニ幽閑の景地ナリ」とあり，のち高山彦九郎の富士山紀行，東海道名所図会などにも東の山の半腹に存在していることを述べているが，鎌倉攬覧勝考になると「先年大風雨の節，山くづれ，大石に圧れ，堂宇も潰れ，今は廃寺となれり」と記載し，寛政九年から文政十二年の間に廃寺となってしまったことがわかる。しかるに寛政三年（1791）江の島下の坊より，江戸本所一つ目の総録屋敷へ書上げた記録をまとめた「江島旧記覚(6)」によれば，

一，三重之塔之義申伝には国々何つと申定有之，新式には不相成由にて，其頃駿河に一ケ所退転の御座候に付，即明院御願にて御取次被成と申事出来致由申伝候，于今塔有之候場所は三畝六分所にて，鎌倉郡手広村青蓮寺と申寺之末寺，円可寺と申て一寺有之場所へ，即明院様御建立之由，右之塔建付円可寺は当山之内外へ引ケ申候て只今は無住に御座候由，（後略）

とあり，即明院＝杉山検校が下の坊に三重塔を建立する過程が語られている（三重塔の建立年月は元禄六年）。この折円可寺が図中に見える三重塔の位置から，東方の山の中腹に引移つたのである。鎌倉物語（万治二年刊＝1695）によれば「一，ゑんか寺の上にふく石，あまがへる石とてあり」とありて，岩本院の上の方にあったことがわかる。東北大学所蔵の「相州江嶋之図」でも，円可寺は岩本院の上の方に描写しており，三重塔は描いていない。これらは三重塔が建立される前の描写であることが推測出来る。そして元禄六年後東方の山中に移つてから，円可寺は寛政三年には無住ではあるが存在していたのである。絵図屋版は寛政七年に版木を焼失して，新たに版をおこしている。この年月は明白でないが，寛政八年下の宮の境内に建立された「百度供養塚」が，新たに

版をおこされたそれには刻み込んでいるので，前述した南郭の詩碑の場合と考えあわせて，その出版態度は良心的である。そのように考えると文化五年版に円可寺が記載されていることは，この当時において無住であったかどうかわ，わからないが依然として存在していたと考えてよかろう。

以上のように見てくると，案内絵図としては大変正確のように聞えるが，やはり誤りもある。その一は，上の宮境内に本地堂と開山堂があるが，これは誤りで両者とも下の宮境内に記載さるべきものである。これは今迄に引用してきた諸書は勿論のこと，寛政二年，総別当たる岩本院が上の坊，下の坊の分をもとりまとめて，寺社奉行所に届けた「由緒並栖地再建物類に関する覚」，同三年の上之坊より岩本院に書上げた覚のいずれにも，本地堂，開山堂はなく，それらは下の宮の境内地にあることを記録している。また上の宮の楼門の前にあるべき鳥居も書き落している。

5

以上のことから絵図屋版の案内絵図を考証した結果，その記載に多少の誤りがあるとはいえ，かなり忠実に描写されていることがわかったが，案内絵図はあくまでも案内絵図であって，江の島のことを全部描きあらわしているのではない。それは旅人に対して欠すことの出来ないものを案内すればよいのであって，いいかえれば案内絵図の目的は重要なものを描き落してなければよいのである。それゆえにこれを基礎的な，あるいは資料的な絵図とし全面的に使用することは出来ない。記載されている事柄は正しいとしても，記載されていないからといって，あるべき建造物がなかったと判断しては誤りであるから。それにしてもこの絵図屋版は，他の絵図に比して，杉山検校之墓，西方庵，延命寺，円可寺，南郭の詩碑などを記載していて旅人にとっては親切な案内絵図であったといえる。

註 (1) 楢崎宗重著「江の島と錦絵」3頁，5頁
(2) 高山彦九郎全集第一巻所収
(3) 上の坊は，上の宮を司どっていたので，上の宮蔵版を売っていたとも解せられる。上の坊版といわれる江の島の図は，ただいまの所筆者は未見である。
(4) 鎌倉攬勝考（文政十二年刊＝1829），巻之十一附録 江島「人家」の項 359 頁参照。
江の島浜のさゞ波（天保四年刊＝1833），39 頁に旅舎惣じて 22 軒とあるが，これに御師凡 30 軒を加えると約 52 軒となる。
新編相模風土記稿（天保十二年刊＝1841），巻之百六 村里部 鎌倉郡巻之三十八「江島」の項参照。
(5) 児玉幸多著「宿駅」の五街道一覧表による
(6) 島田筑波著「江の島弁天と杉山検校」に一部所収